

モーセ①

## □モーセの信仰の手本

信仰によって、モーセは成人したときに、ファラオの娘の息子と呼ばれることを拒み、はかない罪の楽しみにふけるよりも、むしろ神の民とともに苦しむことを選び取りました。彼は、キリストのゆえに受ける辱しめを、エジプトの宝にまさる大きな富と考えました。それは、与えられる報いから目を離さなかったからでした。(ヘブル 11:24~26)

## □これまでの振り返り

1. アブラハム契約・・・神は、全人類の中から一人の人、アブラハムを召し出し、彼に3つの約束を与えた。土地の約束、子孫の約束、祝福の約束である。神はその約束を確かなものとして、アブラハムと契約を結ばれた。3つの約束のうち、土地と子孫の約束はイスラエル民族だけに対するものであるが、これらを通してアブラハムは復活信仰に導かれた。
2. 3つ目の祝福の約束は、イスラエル民族だけでなく、全人類に関係する。「地のすべての部族は、あなたによって祝福される」。その祝福とは、アブラハムが信じた復活である。アブラハムの信仰にならい、神には死者を生かす力があると信じるなら、全人類、だれであっても神から復活の祝福を受け取ることができる。
3. アブラハム契約が必ず成ると信じる信仰は、復活を信じる信仰でもある。この信仰が、アブラハムからイサク、そしてヤコブ、さらにヨセフへと継承された。
4. エジプト寄留・・・ヤコブは、ヨセフの功労によりエジプト王から国賓の待遇を受けて、家族とともに飢饉を避けてエジプトに寄留することになった。神はヤコブに、恐れずエジプトへ行くように命じた。なぜなら、かつて神はアブラハムに、【子孫たちが他国で寄留者となり、400年間、奴隷となる】(創 15:13)と預言していたからである。実際、寄留開始から30年でヤコブの子たちは移動の自由を失い、それから40年後にヨセフは死んだ。
5. モーセの両親・・・ヨセフが死んでから280年後、モーセが生まれた。モーセの父はアムラム、母はヨケベデ(出 6:20)、彼らはエジプト王によるイスラエル民族迫害の中で、命の危険を冒してモーセを隠した。アブラハム契約の約束に基づき、神が必ずエジプトから救い出してくださると信じ、生まれた子どもに神の使命があることを啓示されたからであった。彼らは信仰によって、エジプト王を恐れぬ勇氣を得たのであった。ここでの、信仰の手本の特徴は、信仰による勇氣と決断である。
6. モーセ・・・今回は「個人的な信仰」、次回は「神の使命を行う者としての信仰」

## □モーセ① 個人的な信仰

## 1. モーセの生い立ち 出エジプト 2: 1～11a

- (1) 1～2 節 さて、レビの家のある人がレビの娘を妻に迎えた。彼女は身ごもって男の子を産み、その子がかわいいのを見て、三か月間その子を隠しておいた。
- (2) 3～4 節 しかし、それ以上隠しきれなくなり、その子のためにパピルスのかごを取り、それに瀝青と樹脂を塗って、その子の中に入れ、ナイル川の岸の葦の茂みの中に置いた。その子の姉は、その子がどうなるかと思って、離れたところに立っていた。
- (3) 5～6 節 すると、ファラオの娘が水浴びをしようとナイルに下りて来た。侍女たちはナイルの川辺を歩いていた。彼女は葦の茂みの中にそのかごがあるのを見つけ、召使いの女を遣わして取って来させた。それを開けて、見ると、子どもがいた。なんと、それは男の子で、泣いていた。彼女はその子をかわいそうに思い、言った。「これはヘブル人の子どもです。」
- (4) 7～8 節 その子の姉はファラオの娘に言った。「私が行って、あなた様にヘブル人の中から乳母を一人呼んで参りましょうか。あなた様に代わって、その子に乳を飲ませるために。」ファラオの娘が「行って来ておくれ」と言ったので、少女は行き、その子の母を呼んで来た。
- (5) 9 節 ファラオの娘は母親に言った。「この子を連れて行き、私に代わって乳を飲ませてください。私が賃金を払いましょう。」それで彼女はその子を引き取って、乳を飲ませた。
- (6) 10 節 その子が大きくなったとき、母はその子をファラオの娘のもとに連れて行き、その子は王女の息子になった。王女はその子をモーセと名づけた。彼女は「水の中から、私がこの子を引き出したから」と言った。
- (7) 11 節 a こうして日が立ち、モーセは大人になった。彼は同胞たちのところに出て行き、その苦役を見た。

## 2. モーセの生い立ち 40歳まで（使徒 7: 17～23、初代教会の執事ステパノの弁明）

さて、**神がアブラハムになされた約束の時が近づくにしたがい**、民はエジプトで大いに数が増え、ヨセフのことを知らない別の王がエジプトに起こる時まで続きました。この王は、私たちの同胞に対して策略をめぐらし、私たちの先祖たちを苦しめて幼子を捨てさせ、生かしておけないようにしました。モーセが生まれたのは、このような時でした。彼は神の目になつた、かわいい子で、三か月の間、父の家で育てられましたが、ついに捨てられたのをファラオの娘が拾い上げ、自分の子として育てました。**モーセは、エジプト人のあらゆる学問を教え込まれ、ことばにも行いにも力がありました。モーセが四十歳になったとき、自分の同胞であるイスラエルの子らを顧みる思いが、その心に起こりました。**

3. ヘブル 11：24～25 節 モーセは、「ファラオの娘の息子」と呼ばれるよりは、むしろ神の民とともに苦しむことを選び取った。
- (1) 信仰は、「ファラオの娘の息子」として受ける待遇を「**はかない罪の楽しみ**」と考える。プロスカリロス「束の間の、その時限りの、その季節の、一時的な」
- (2) 信仰は、エジプトにつながれ、泥だらけの奴隷の民を、「**神の民**」と受け取る。
- (3) 信仰は、「**楽しみ**」よりも、「**苦しみ**」を選び取る。
4. 26 節 モーセは、キリストのゆえに受ける辱しめを、エジプトの宝にまさる大きな富と考えた。それは、与えられる報いから目を離さなかったからであった。
- (1) 「**キリストのゆえに受ける辱しめ**」 次の三つの解釈
- ① 「油注がれた者のゆえに受ける辱しめ（そしり）」・・・モーセ自身が「油注がれた者」である。モーセは、エジプトからの解放という使命に自分が召されているという自覚をもっていた（使 7：25「**自分の手によって神が同胞に救いを与えようとしておられる**」）
- ② 「キリストのゆえに受ける辱しめ（そしり）」・・・モーセは、キリストの型である。モーセが受けたそしりは、後にメシアが受けるそしりと同じようなものである（詩 69：9「**あなたを嘲る者たちの嘲りが私に降りかかった**」）
- ③ 「油注がれた者（イスラエル）が受ける辱しめ（そしり）」・・・ここでの「油注がれた者」とは、油注がれた民族、イスラエルを指す（詩 89：50～51）
- (2) 「**～にまさる大きな富と**考えた****」ヘゲオウマイ＝指導する、命令する（公的な権威をもって）→正確で権威ある根拠に基づいて考える、評価する、計算する
- (3) 「**与えられる報いから目を離さなかった**」・・・報いとして与えられるものの価値を正当にわきまえて、エジプトの宝、すなわち当時の世界をリードしていた超大国の宮廷での地位と富にも目を向けることがなかった。

□モーセの信仰の手本から本日学んだ内容を確認しましょう。楽しみより苦しみを選び取るという決断、そしられても辱しめられても自分はいえそれを受けるという勇気を、モーセは信仰によって持つことができました。では、モーセは、どのようなことを信じたのでしょうか？